

オンラインシンポジウム「公害資料館が果たす役割と未来」

対話④「教育資源としての公害資料館」コメント

2022/01/08 金子 淳（桜美林大学）

はじめに——博物館研究の観点から

公害資料館は「博物館(Museum)」か？

- そもそも博物館(Museum)の概念は曖昧。
- 日本においては、どのような施設名称を名乗っているかどうかは関係なく、水族館や民家園、プラネタリウムまで含むような、かなり広範な概念。

博物館の定義

- ① **実物資料**を収蔵(飼育含む)していること
- ② 継続的な**展示施設**・設備を備えていること
- ③ **職員**による**公共的運営**がなされていること
- ④ 継続的な**一般公開**を目的としていること

(伊藤,1993)

はじめに——博物館研究の観点から

公害資料館は「博物館(Museum)」か？

- 公害資料館を「博物館」として捉えるとすれば、博物館研究の文脈で公害資料館を取り上げることに一定の意義が認められる。
- そのような合意が得られるか？
 - ➔ それが、公害資料館の教育機能に関する議論の出発点が共有できるかどうかの分岐点

はじめに——博物館研究の観点から

公害資料館を博物館研究の観点から捉えることの意義

- しかし、公害資料館は、博物館関係者にとって無関係、対象外と認識されてしまう傾向にある。
 - 博物館学は運営上のノウハウを追求する「実学」という性格が強く、悪くいえば、業界内部の「内輪話」に終始しがち。
- だからこそ、「公害資料館で学ぶことの意義」を考え、博物館の問題としても広く共有することはきわめて重要。
- 公害資料館の「教育資源化」を進め、社会に広く入り込んでいく活動をすべきという著者の問題提起には大いに賛同したい。

論点①

公害資料館の「専門性」をどう捉えるか？

論点① 公害資料館の「専門性」をどう捉えるか？

教育内容の妥当性を担保する学術的な専門性

- 博物館として考えるなら、まず、その活動を担う専門職員(学芸員)の問題が論点にあがる。
- 博物館であれば、**専門職員(学芸員)**による学術的な調査研究の成果に基づいた活動がベースとなるが、運営スタッフの確保もままならない公害資料館の場合は、**外部の専門家**の役割が大きくなるはず。
- いずれにしても、公害資料館の教育資源化について考えるには、**教育内容の妥当性を担保する学術的な専門性**の問題は避けては通れない。

論点① 公害資料館の「専門性」をどう捉えるか？

公害資料館における構成主義的知識観

■ ジュリア・ローズ「困難な歴史を解釈する」(pp.26-27)

- 「困難な歴史」とは？ = 奴隷制などの差別、ジェノサイド、戦争被害、疾病、テロなど
- 「困難な歴史の解釈」にあたっては、「歴史実践家」(公害資料館の場合は職員、ボランティア)の役割を重視
- 来館者も歴史実践家も、**ともに学習者**
- 「知識は内面にあり、学習者によって構成される」とする**構成主義的知識観に立つ学習**を重視

■ 構成主義的知識観に基づく学習が公害資料館で行われることの意義

論点① 公害資料館の「専門性」をどう捉えるか？

構成主義的知識観への懐疑

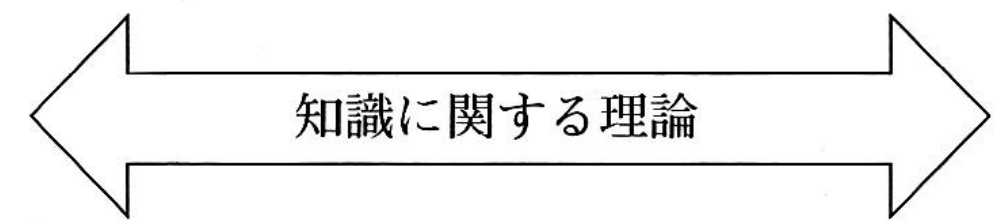
■ 構成主義的知識観(ハイン,2010)

- 知識は、**学習者の外側に客観的に存在しているのではなく**、学習者の内側に存在し、社会的影響により構成される。→「客観的な知識」の否定

■ 教育学者・小笠原喜博(2015)による批判

- 客観的でない、外在的な規準によらない認識など、ほとんどあり得ない
- 知識の客観的な正当性までもも否定してしまっっては、本末転倒である
- 知識の正当性を観覧者に預けてしまっっては、博物館が文化を継承し、市民に正しく伝えるという役割を失わせてしまう

知識は学習者から独立して存在する(实在論)



知識は内面にあり、学習者によって構成される

論点① 公害資料館の「専門性」をどう捉えるか？

構成主義的知識観と「専門性の否定」？

- 構成主義的知識観に基づけば、学術的な調査に基づいた研究成果も、「客観的な知識」として否定されてしまうのか？
- 受け手の能動的な学習や「解釈の自由」を優先するあまり、「客観的な知識」を正しく伝えることが否定されるとすれば、**学術的な専門性の否定**にもつながってしまうのではないか？
- ただし、「学術的な専門性」といっても、公害のような負の記憶には「定説や合意が存在しない」(竹沢,2015)という側面も確かにある。このことに関しては後述。

論点① 公害資料館の「専門性」をどう捉えるか？

「客観的な知識」「客観的な真実」は存在しないのか？

- 「公害の歴史」に当てはめれば、専門家によるこれまでの地道な調査研究の積み重ねがあってはじめて、公害の実態や、健康被害との因果関係が明らかになってきた。
- このことは、「客観的な知識」として多くの人々によって合意されているからこそ、学習者の外側にあらかじめ存在しているはず。
- だとすれば、その「客観的な知識」を「知る」「伝える」ことが重要になるのではないか(コロナ禍で専門家の知識が必要とされたように)。
- しかしそれは、一方的な「啓蒙」として捉えられてしまうかもしれない。

論点① 公害資料館の「専門性」をどう捉えるか？

「困難な歴史」の解釈～戦争展示に関連して～

- 「困難な歴史」に関する「解釈」についても、もちろん学習者の「解釈の自由」は保障されなければならないが、たとえば公害自体を正当化したり、公害被害を否定するような「解釈」は決して許容されない。
- 「正しい解釈」は必ずしもあるわけではないが、「間違った解釈」は確実に存在する。そして、「間違った解釈」については、学術的な専門性に基づいてNOを突きつけなければならない。
- 歴史修正主義が台頭し、社会の右傾化が進む現在、戦争展示に関しては「悪意ある解釈」の問題が実際に頻発している(金子,2012・2021)。
(例)あいちトリエンナーレ2019「表現の不自由展・その後」

論点②

手法としてのアウトリーチ

論点② 手法としてのアウトリーチ

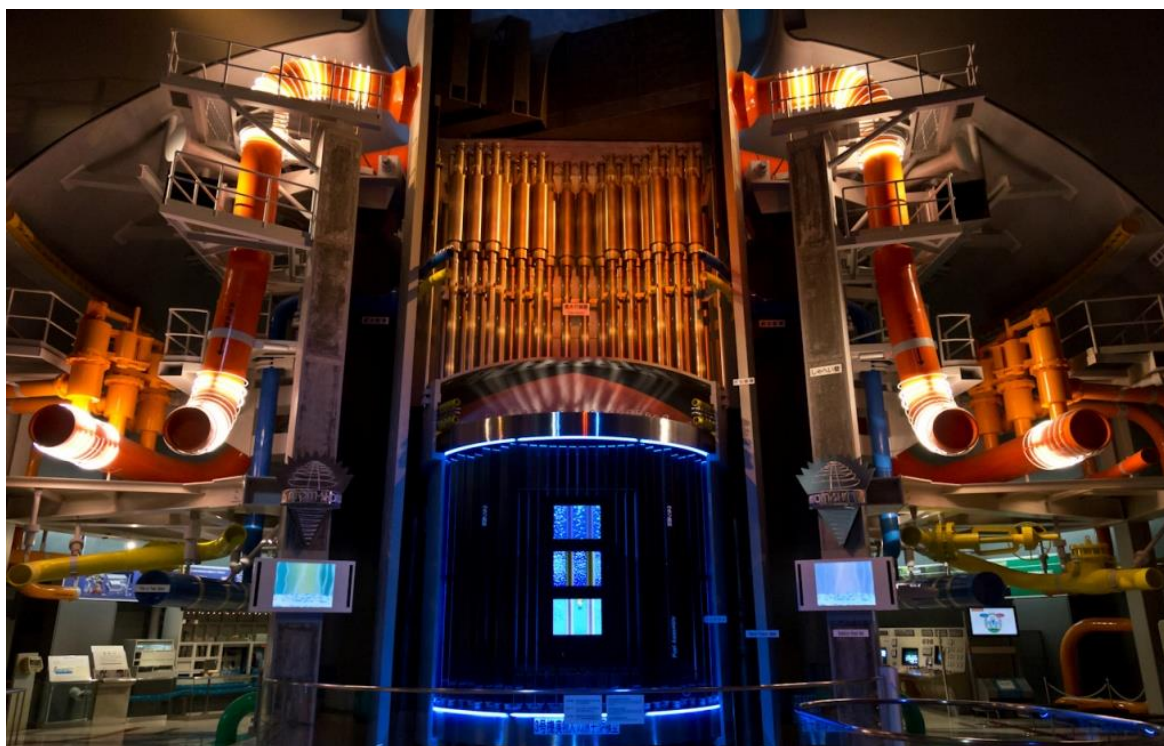
「社会の中に入り込む」アウトリーチの重要性

- 「困難な歴史を解釈する場」としての公害資料館にとってのアウトリーチのもつ重要性
 - ・ 公害資料館の教育資源性をめぐる社会的合意を広げるために、資料館が「アウトリーチ」と呼ばれる活動を通してよりいっそう社会の中に入り込んでいくことが重要。(p.27)
- アウトリーチは、メッセージを効果的に伝え、広めていく手段としての意義は十分になる。そのほか、たとえば**参加・体験型展示**や**ハンズオン(触察型)展示**、**フォーラム型の展示**なども、メッセージを伝達する手法としては非常に効果的。

論点② 手法としてのアウトリーチ

(例)原発PR館の「効果的」な展示手法

- 一方で、メッセージを伝達する手段として効果的であることと、メッセージそのものの(中身)とは分けて考える必要がある。
- このことについて、原発PR館(原発の正当性や有用性というメッセージを、高度な展示技術を駆使して伝達する施設)を例に考える。



浜岡原子力館

論点② 手法としてのアウトリーチ

(例)原発PR館の「効果的」な展示手法

- 特に電力自由化前は、原発PR館の運営費が、総括原価方式における「原価」に含まれていたため、莫大な予算を確保できた。
- 予算削減の渦中にある博物館の世界の中で、原発PR館は例外的に、潤沢な資金を投入して、伝えたいことをそのまま展示として形にできる稀有な存在(参加体験型展示、ハンズオン展示、フォーラム型展示、アウトリーチなどさまざまな手法を駆使)。
- そのメッセージを伝える手法が高度で効果的であるほど、**原発の正当性を盲信させることにも「貢献」**してしまうという、皮肉な結果をもたらす(金子, 2013)。

論点② 手法としてのアウトリーチ

(例)原発PR館の「効果的」な展示手法

- しかもそのメッセージが、原発被害のリスクをまったく欠いた偏ったものであるとすれば(実際に偏っているが)、**その手法が効果的であればあるほど危険。**
- 高度で巧妙なパフォーマンスを通してメッセージが効果的に伝達できることが、「良い手法」「良い展示」「良い活動」といえるのか？
- アウトリーチによって「社会に入り込む」のが、公害資料館ではなく原発PR館だったら？
- 特に「困難な歴史」と向き合うためには、むしろそのような手法自体も相対化して批判的に検証していく視点が必要になるかもしれない。

論点② 手法としてのアウトリーチ

「何を」「どのように」伝えるのか？

- 公害資料館についていえば、たとえば「被害の否定」「因果関係の否定」「被害の軽視」といった偏ったメッセージが、そのような「効果的な手法」によって、「社会の中に入り込んで」いってしまう危険性もある。
- したがって、メッセージを「どのように」伝えるかという「手法」とともに、教育資源として「何を」伝えるかという**学術的な専門性に基づいた確実なメッセージ**についても、合わせて考えていく必要がある。
- このことは、単なる「公害克服物語」という単純化されたストーリー、あるいは「影」から「光」への「価値転換」という安易なメッセージに対して警鐘を鳴らしていた清水万由子論文ともつながる。

文献

- 伊藤寿朗（1993）『市民のなかの博物館』吉川弘文館
- 小笠原喜博（2015）『ハンズ・オン考 博物館教育認識論』東京堂出版
- 金子 淳（2012）「戦争観の形成と戦争展示～『熱い論争』と『冷ややかな無関心』という落差をめぐって～」『静岡大学生涯学習教育研究』14
- 金子 淳（2013）「展示される「原子力の夢」～浜岡原子力館における『原子力コミュニケーション』とその表象～」『静岡大学生涯学習教育研究』15
- 金子 淳（2021）「博物館展示における意図と解釈」『桜美林大学紀要 社会科学研究』1
- 竹沢尚一郎（2015）『ミュージアムと負の記憶』東信堂
- ハイン, ジョージ（2010）『博物館で学ぶ』同成社